

滝沢克己『聖書を読む マタイ福音書講解』の研究 その六(上)

富 吉 建 周・中 島 秀 憲

一.

いよいよ我々は「山上の説教」の研究にとりかかることにする。今回は、その冒頭の「幸いなるかな」(五章一一一二節)をその課題とする。滝沢克己はその『聖書を読む マタイ福音書講解』第二巻において、その「幸いなるかな」の詳しい解釈を行っている。ここでは、各節の独創的な註解にはいる前に、イエスの「山上の説教」全体(五―七章)についてどう読まれて来たか、従来のその総括的な解釈をとりあげ、その批評を行っている。椎名麟三、L. トルストイ、内村鑑三、A. シュヴァイツァー、K. バルト=E. トゥルナイゼンの読み方・解釈。我々は、バルト=トゥルナイゼンの解釈についての滝沢克己の批評をとりあげる。その批評において、我々は、滝沢克己の「山上の説教」についての読み方・それについての解釈の方法・滝沢克己の視点を見てとることができるからである。

さて、バルト=トゥルナイゼン¹⁾の「山上の説教」についての解釈の要諦は「ここに書いてあることは、ただ普通に考えたんじゃ意味をなさない——意味のあること、現実に意味のある教え・言葉とは受けとれない——けれども、ただイエスが話した言葉・キリストであるイエスが話した言葉としてこれを聞くと初めて意味がある、分ってくるし、その意味の深さっていうものが私たちに悟られると、そういう考え²⁾」にあると滝沢克己は受けとめる。しかしながら、滝沢克己は「そう言われても、やっぱりどうも何のことか分かりません。イエス[人間イエス]が言ったということになると、これは本当のことで、何がなんでもこれは従わなくちゃならないし、従うことができるものだということになりますと、やっぱりある点で日本の天皇の詔ということがあります、それにちょっと似ている。³⁾」と疑問に思う。なるほど「^{みことり}詔を承りては必ず^{おたね}謹め」というのは聖徳太子の憲法十七条にあることで、それはそれなりに或る範囲で意味を持つてくる。今でもそりゃそう言います。……知識が正しいとか正しくないとか、良い悪いということがそこでは問題にならなくなる、というようなこと[例えばいったん法律として制定されると、それが良い悪いということは第二

のことで、とにかく法に従うことが第一のことだと。] がやっぱり人間の世界にはあるのです。必ずしも聖徳太子の憲法の或る箇条だけではないです⁴⁾』ということはあ
る。しかしながら「そう聞かされても、どうしてそんなに、それならイエス〔人間イ
エス〕の言葉であれば権威をもってくるのか⁵⁾』という疑いは依然として残る。この
疑問に対するバルト＝トゥルナイゼンの答えとして、滝沢克己は、彼等の信仰の立場
に基くものだと洞察する。即ち、「イエスという人が、本当の救い主〔キリスト〕だ、
神様だというふう to 実際バルト＝トゥルナイゼンは信じていました⁶⁾』と。従って問
題は、キリスト論の領域のことにならざるをえなくなる。しかも「イエスは救い主^{キリスト}
であると信ずる」という場合の「救い主^{キリスト}」とは人間イエスと同じ次元のことではありえ
ないと、滝沢克己は、次の如くに確認する。即ち「イエスの言葉であれば、というけ
れども、イエスと言葉とは次元の違うものではないです。だから、こういう話を発す
る・この発語するということが躰が動くということですから、ある姿が現われること
です。だから発語ということは姿ということで、その吐かれた言葉・その発語（の）
その後^{うしろ}に何かイエス自身というものがいるわけじゃないです。歴史の中に出てきたイ
エスという人はこういう言葉を語った、その語られた言葉そのものがやはりイエスで
す。だから人間イエスは、イエスという人は、語られた言葉と同次元のものだとい
うことをまず考えておかないといけないだろうと思う⁷⁾』と。つまりバルト＝トゥルナ
イゼンの信ずる「救い主^{キリスト}」とは、人間イエス及びその言葉と同じ次元のことではない
ということである。従って「やっぱり問題になってくるのは結局、イエスが発した言
葉だから本当だというのは、イエスが——これは姿・形——イエスという人が本当の
救い主だというふう to 信じているから、（イエスは）神様だというふう to 実際バルト
＝トゥルナイゼンは信じていましたから、それで、本当の神様であるイエスが言うこ
とだから本当だ、というふう to 一応形式的には考えられますけれども、それではまだ
さっぱり一般の人には分らないです。それは、イエスを神様だと信じていれば、そ
ういうふう to 何んでもかんでも本当だということになるかもしれないけれども、しかし
イエスが神様かどうかということがそもそも問題ですから、それで、バルト＝トゥル
ナイゼンが言った「イエスが言ったから本当だ」というのは、そのイエスという人の
どこを見て、どの点をさして、バルト＝トゥルナイゼンはそういうこと〔イエスは本
当の救い主^{キリスト}である〕を言ったのか、ということが問題となります⁸⁾』と。このように
滝沢克己は、バルト＝トゥルナイゼンの「イエスは救い主^{キリスト}である」という信仰の立場
をさらに分析して、彼らの拠って立つ根源的な事実を剔出しようとする。滝沢克己は、
その「どこ」・「どの点」（キリスト論的な・人間イエスと同じ次元ではないそれ）に
ついて、バルト＝トゥルナイゼンの「全く、非常に独特な考え方」（彼らの神学の核

心)に基づいて、解明する。そのバルト＝トゥルナイゼンの「考え方」を次の様に解釈し、それを要約する。即ち、「イエスが生れて、この地上で苦しんで、十字架についたということです。それはどういう出来事かということ、バルト＝トゥルナイゼンの考えでは、神様が、ほんとうの神様が人間の世界を憐れんで、(人間の罪や不幸を引き受けてくれた、ということなんです。)色んな罪や不幸が渦巻いていて、そのままにしておけば、人間が生きても結局は真っ暗な渦 [虚無] に呑み込まれてしまうという状態にあるのを憐れんで、神様が憐れむ理由は別にないのだけれども——無償の憐れみ——、ただ憐れんで、神様ご自身がこの地上に来て、その人間の罪・人間の禍を引き受けてくれたと。だから、天上の神が、聖なる神・永遠の光であり生命である神が、何という理由はないけれども、とにかく地上に来て、人間の運命・苦しみを自分のこととして引き受けてくれたと。それがイエスの十字架の出来事なんだ、ということです。それによって、今まではただ真っ暗な渦・淵に呑み込まれるほかになかった人間が、確かな神様の座につかせられた、神様のいるところが人間のいるところになったということです。神が降りてきて人間を引き受けてくれたと、そうすると神のいるところが、人間のいるところになる。だから人間のあらゆる罪にもかかわらず、人間のいるところは、もうただの真っ暗い渦・淵じゃない、そこは永遠に確かな生命であり・光であり・創造の力である神様がいるところだ、ということです。ですからそういうことが [本当の神様であるイエスによって] 実際に起った、それがイエスの十字架の出来事の真相だ、というのです。だから、バルト＝トゥルナイゼンの考え方によりますと、イエスが来てくれたお蔭で、人間のいる世界というのはただの暗い淵じゃなくて、確かな支えがあり、また生きるバネがちゃんと与えられているそういうところが、今我々各自のいるところなんだ、というのです。だから、イエスが来たということ、イエスの出来事というのは、それは、人間のいるこの世界の状況、どういうシチュエーションかということが、根本的に変わったということです⁹⁾」と。要するに、バルト＝トゥルナイゼンの考え方とは、キリストであるイエスが来たことによって、「人間が、確かな神の座につかせられた、神のいるところが人間のいるところになった」ということ、「人間のいるこの世界の状況が根本的に変わったということがイエスの出来事だ」ということ、換言すれば、イエスが来たことによって「インマヌエルの原事実」が成立したということ、なのである。

結局、バルト＝トゥルナイゼンの「イエスの言葉だから本当だ」ということは、次の様な根源的な事実に基いているのだ。「イエスが来たお蔭で根本状況が変わった。人間は、人間自身ひどいものだけれども、絶望したり、いらだったりしなくてもいいという、ここにちゃんと支え・足場があるんだということ、決して失われない、全然ビ

クともしない祝福が、愛が人間を包んで、その愛の主がみつめていてくれるということです。そこから、世界の根本が変わって、わたしのいるところがそういう確かな場所だというその場所に、そういう言葉が、我々が聞かなくても、鳴り響いている、誰も聞かなくてもこれは響いている。その神の福音が、響きが、それが言葉となって発したものが、いわゆる山上の垂訓なんだ」ということである。¹⁰⁾と。

従って、バルト＝トゥルナイゼンの「山上の説教」についての解釈の視点は「祝福」であり、「愛」であり、「神の福音」である「インマヌエルの原事実」におかれていますので、彼らは「山上の説教（五―七章）」の最初の言葉が「一つの限定の方が先に出ている¹¹⁾」「こころの貧しい人たちは、さいわいである¹²⁾」ではなくて、原文に即して「幸福なるかな、心の貧しい者¹³⁾」の如くに「さいわいなるかな」であることが、厳密に即事的で必然的なことであることを理解している。なぜなら「この「さいわいなるかな」というイエスの言葉は、普通の意味で語る人がなくても出てくる言葉なんです。人の言葉ではあるけども、しかし人の内部から出てくるのではない。「さいわいなるかな」と、いきなり来るわけです。その「さいわいなるかな」ということが先です。あなたが今いるところは、恵みの場所だということが先にある。¹⁴⁾からである。そして「その「さいわいなるかな」ということが第一にあるのだということ」を心に留めると、そこからはまた、この三章〔五―七章〕に書いてある言葉が自ずから出てくる、ということが分ってくるのです¹⁵⁾とも言う。例えば、「幸福なるかな、心の貧しき者」（五・三）ということも「イエスが来たということは、世界の根本状況が変わったということで、我々の内や外を見ると、目が廻って渦に引き入れられるけども、しかし、足もとを見ると、ちゃんとそこに確かな足場があるということ。「さいわいなるかな」はどんな人でも問題ではないです。善・悪、信仰があるとかないとかいうことは最初の問題ではない。むしろ「さいわいなるかな」という言葉がまず出てくるのです。そうすると、そこから初めて今の「心の貧しい人」ということが、どういう意味で言われているか（「なんにも持たない者」「人間の主体性、^{からだ} 軀も心も含めて人間全体の主体性というものが全然ない者」「本来無一物」¹⁶⁾。）ということも分ってくるわけです。積極的なものが、「さいわいなるかな」という言葉が先になれば、この後に出てくる言葉〔貧しい者〕というものはみんなただ人間の限度を超えたつていうふうにしかならない言葉なんです¹⁷⁾と。また「昔の人はこういったけれども、しかしわたしは言う」（五22、五28、五32、五34、五39、五44）¹⁸⁾についても、「さいわいなるかな」から切り離してそれだけを見ると「人間の限度を超えた」要求のように受けとられるほかはないのであるが、「さいわいなるかな」から分節化されて出てきたものだと受け取ると、意味をもった誰にも実行可能な要求と受け容れることが

できるものとなる。即ち、「[しかしわたしは言う]とイエスが言った時には、イエスのところに全然問題なしに確かなことがあって、そして——そこからしか人は生きられない、そこでだと必ず生きられる、という場所がある——そこから、「しかしわたしは言う」ということは出て来ているわけです。ですから、普通いうわたしの内側から出てくるのじゃない、普通いうわたしということ、わたしの思想ということにはない、事実来ている福音の原音（「さいわいなるかな」）がありますが、それがこういう言葉「[しかしわたしは言う]」で発露されていると言わなくてはならないのです¹⁹⁾と。

かくの如く「さいわいなるかな」という「インマヌエルの原事実」は、神の福音は、「人間が、確かな神様の座につかせられた、神のいるところが人間のいるところになった」という「恵みの場所」は、人間イエスの根底に実在する、この世界・この人生における根源的な事実であり、イエスの働き（メシヤとしての働きも含めて）に拠らない太初から実在する普遍的な事実であり、「初めに言^{ことば}があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」（ヨハネ一・一一三）²⁰⁾という我々の人生の大前提である「言^{ことば}」である、ということを我々は確認した。ところが、バルト＝トゥルナイゼンは「イエスが来たお蔭で根本的状況が変わった²¹⁾」、イエスが来て十字架に架けられることによって「インマヌエルの原事実」が成立したと考えるのである。ここにバルト＝トゥルナイゼンの考え方・解釈の根本的な問題がある、彼らのキリスト論の根本的な欠陥がある。即ち、「ですから「[しかしわたしは言う]」（イエスの働き）と言った時には、そこは断固としてもう本当に、誰がなんと言おうとそこは確かだということがイエスにちゃんとあって、そこを踏えて、そこからこういう言葉が出てくる」ということですから]、バルト＝トゥルナイゼンの言うことが日本人に、殊にクリスト教徒でない人に分らなくなってしまうということは、バルト、トゥルナイゼンは、実際イエスが「しかしわたしは言う」と言った時に踏えていた、その確かなところがここにあると、ここが福音の場所だということがバルトには、或る時明らかになって、そこから言っているわけです。だからその点で、バルト＝トゥルナイゼンの言うことというのは、やはり直接我々に訴えるところがあるのですが、ただ、根本的状況がイエスが来たということで変わったという、そこが今までの古い宗教の考え方が、ヨーロッパの伝統的な考え方が残っているのです。実際は、イエス、人間イエスが現われたから、人間のいるところが神の福音の確かな場所になったわけではないです。人間が成り立って来るところというのは、人間のわたくしというものが全然働く以前のことでですから、そのところが先なんです。

だから、神の救い・神の支え・神の励まし・神の赦しが実際にあるということは、人間がなんか人間以上の偉いものということになるのではなくて、むしろ人間であっていいと、人間の・人間におかれている限界というものが決して悲しむべきものではなくて、限界があるということは人間には実にありがたいことなので、それを超えるとかそれを振りはらうとか、揺がすということは絶対にできない、人間の意志というものを・恣意というものを全然許さない、それに対してどんな権力も無力だということ、そういうことが先にあって、だからイエスが「しかしわたしは言う」と言った、そのイエスのところにある確かなことというのは、イエスが現われて言ったから確かになったのじゃなくて、それが問題なしに確かだから、だから「しかしわたしは言う」というイエスの言葉「イエスの働き」が出てくるわけです²²⁾と。要するに、人間が成り立ってくるところに、人間イエスの根底に、神の救い・神の支えが実際にあるのであり、その福音の場所は人間イエスの働き以前のことであり、人間イエスの絶対的限界であり、この実にありがたい絶対的限界を踏えて人間イエスの働きや「しかしわたしは言う」という言葉も出てきているのである。それ故にバルト＝トゥルナイゼンの「人間イエスが現われたから、人間のいるところが神の福音の確かな場所になった」という考えは本末を転倒しており、イエスは「まことの人間」だと言うけれどもこの絶対的限界が曖昧であるので、何を踏えて人間ということをしていっているのかわからないのである。実際に聖書のイエス・「イエス自身を見ていると、イエスはどっか変に神様ぶった人になったか」というと、そうではないです。まったく、酒を飲んだり^{おおめし}大飯を食べたり、そして一番人間の中の、普通の人間がもっとも問題にしないような人と一緒に、なんの違和感もなしに、そういう人と暮していた、という人です。ですから、イエスが（来たから）、イエスのこういう言葉が出てきたから、だから我々のいるこの場所が神聖な場所になるのではないです、福音の響いている世界になるのではないです。そうではなくて、もともと人間が成り立ってくるということは神の手（の中）に成り立って（きているということであり）、神の視線のもとに人間が生きるということは起っている（のです）。ただそれを無視して、自分が見たり聞いたりしているかのように思うということが、禍のはじまりです²³⁾と。

従って、滝沢克己は「聖書を本当に読む」ためには、バルト＝トゥルナイゼンの考え・キリスト論の根本的な問題を改める必要があると言う。「イエスが「しかしわたしは言う」と言った、そのイエスが立っていたその土台・その言葉の泉というものは、人間イエスが何か言ったりしたりしたのでできたものではないです。それがあのに誰も知らない、そのために物凄いことが人間の世界に起っている、そのただ中でこういうこと「神の福音」を言った、ということですから、それが本当のことです。ですから

確かに、こういうことをイエスが言ってくれたということは大変なことで、こんなにはっきり、人間の生命の一番奥のこと・しかも今ここにあること・だれも俺はそれに関係ないということが言えないような本当に根本的なことを、こういうふうにかちつと、ピシャッと言ってくれたという人はないのです。それは本当に驚くべきことです、この五章から七章の言葉が残っているということは、伝えられたということは。ですから、この聖書の言葉 [イエスの言葉・人イエスの姿形] というのは大事ですけども、しかし、これが絶対に始めて終りのことというのではないです。絶対に始めて終りのこと [インマヌエルの原事実] は、単純に、今ここにある、そのときイエスのところにあったように今ここにあるのです。……世界は神の世界だという・我々は僕だ^{しもべ}という・そういうファクト＝事実ですから、だから（人間の）正・不正ということ [人間の働き・行為] に根本的に、——これは時間の上でなしに——先だつファクトなんす、そこから出て、そこを指さしている言葉だと考えなくてはなりません²⁴⁾と。

二.

我々はすでに滝沢克己の「山上の説教」についての解釈の方法を確認した。即ち、単純に、無条件に、理由なしに、今ここに実在する「恵みの場所」・「神の福音」・「神の座即人間の座」・「インマヌエルの原事実」こそ「さいわいなるかな」と第一に、何よりも先に言い表されていることであり、この根本的でユニヴァーサルな「神の原福音」に視点を置いて、個々のそこに限定されたもの、そこから分節化されたものを理解してゆく、解釈してゆくという方法である。マタイも「インマヌエルの原事実」に視点を置いて、そこに成り立っている秩序ある歴史のイエスを、その秩序である「精神の面・言葉の面」を先とし、「身体の面・奇蹟的行為の面」を後として、再構成しているのだ。この滝沢克己の聖書の読み方は、聖書に適う方法でもあるのだ。即ち、「実際、本当に始めて終りということ [さいわいなるかな] が今ここにある、刻々にある、ということが分って、初めて内面というものが限界づけられている（ということも分ってくる）。絶対に外 [恵みの場所・神の手] ということがなくて人間の内 [内面] ということはないということです。だから、一番基本の「さいわいなるかな」という言葉がいきなり出てくる、そのところからは、いわゆる内面というものも出てきますし、それから一つの「弟子たち」というもの、一つの教団というものも出てくるでしょうし、それからまた「イエスの言葉だから [しかしわたしは言う]」というようなことも出てくるわけです。しかし、これらの言葉が出てきている元 [御国の福音] は、今言ったようなところに、ここにあるので、（それらの言葉は）、その「御国

の福音」の言葉の面です。だから、福音の証し、原福音の反響として初めて、これは理解できる言葉だと言っていいのです。そうすると、自然にこれは読めてきます。例えば「心の貧しい人たちは、さいわいである」[口語訳] というのも、「さいわい」・「さいわいなるかな」ということが先にあって、(その) いつも新しい一つのところから、これはすべて「心の貧しい人」ということも「悲しんでいる人」ということも「柔和な人」ということも全部言われているということです。だから、後にこの一つの「さいわい」ということがくるんじゃないです、まず第一に「さいわいなるかな」という言葉が出てくる、それが分節するとういうことになるんです²⁵⁾」と。次に滝沢克己のこの方法に基づく具体的な各節の解釈を見ていくことにする。

「さいわいなるかな、心の貧しい者。天国はその人のものなり」(五・三)について。

「心の貧しい者」というのは、ですから、なんにも持たない者ということです。人間が……自分の内にも外にも持物もちものを持たないということ、“これがあるから自分には生きがいがある”というようなことが何にもない人ということです。……だからこれは、ただそういうふうに言うと単にネガティブなことになりますけれども、ただネガティブなことじゃなくて、この「さいわいなるかな」ということが最初にあるんです。だから、本当に自分の主体性というものが絶たれているところ・だから“わたし”というものが絶えたところで・絶えたところから生きている人(本来物一物)、「そういう人のものだ」と、「天国っていうのは」。そういう人は、今ここに、この世の中に生きているけれども、しかし既に神の国に生きているわけです。だからそれは[神の国]はそういう人たちのものだ、ということになります²⁶⁾」と。またルカの「平野の説教」では「貧しい人」となっているのに、マタイが「心の」ということを編集に際して入れたということに関して、「ここで「心の」ということが入っているから、マタイは、ユダヤでは大体貧しい人といえば、普通言う意味で貧しい人ということなのに、こういうように内面化して、マタイは現実の問題をぼかしてしまったと、回避したと解釈する人(田川建三もその一人)がありますが、しかしそうでないことはもう明らかです。その「心の貧しい者」というのは、主体性というものが全然絶たれている・主体でないということを本当に知っている主体(であり、そういう)人は幸せだということなんです、そういう人は既に天国に生きているということなんです。それは本当にその通り[真の現実]です。アーメンと言うほかない言葉です。それから、普通言う意味で階級的に抑圧された貧しい人たちは幸せだと、今の威張っている人たちは実はもっと不幸だという、そういうことも勿論そこから出てきます。そういう人たちは、今の、いわゆる秩序の中でただ安んじているということができません。だから本当に、なんとかして本当に生きたいということがあります、息をつきたいということが

ある。だから、世の中からはやっぱり認められないイエスのような人の言葉も、話も聞こうということになる。そういう意味では非常に近いわけです。だから、第二のこと、第二次のこととして、そういうことも言えるのです²⁷⁾」と。さらに念を押して滝沢克己は次のようにも語る。「[心の貧しい者] といっても、それはただ躰と分けて心ではないのです。そうじゃなくて、人間全体に関して言っているわけです。だから、人間の存在というものはもともと主体ではないと、その意味で何か窮極的に最後の何かを持って落ち着こうとしたら間違いだと、いうことです。そういう意味で、人間というものは貧しい者だから、元来富んでいる者のように主人であるように思ったらいかんということなんです。きわめてこれはリアルなことです²⁸⁾。」と。つまり人間存在というものは、その根底に実在する神・神の国の豊かさに比較すれば、被造物にすぎないもの、有限なるもの、何ものでないもの、貧しい土のちりにすぎないものだということである。従って、マタイは、旧約の「創世記」二章七節の「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった²⁹⁾。」ということとを、そこに明確に表現されている被造物の本質の規定が「土のちり」（創造者である神に比較すれば）であるということとを、よく理解している、と言わざるをえない。

次に、「さいわいなるかな、悲しむ者。そ人は慰められん。」（五・四）について。

「（愛する人を失なった）場合に、ただ一般的に同じように悲しむということが或る意味ではありましようけれども、しかし、ただそれだけに尽きないです。やっぱり人間というものの悲しみというものは、（それだけに）尽きないんです。ですから、この「悲しみ」というものは、やっぱり「さいわいなるかな」ということに直接結びついている悲しみなんです。これはやっぱりイエスの場合をよく見詰めてみると、はっきり分ることです。イエスは「さいわいなるかな」という祝福を負うて生れてきた人です。ところが、本当に祝福を負うて生れて、人間が人間としてこの世界で生きるということになると、人間がいかに無理をして・不自然なことをして自分をも他人をも不幸にしているか、世界を真っ暗にしているか〔人間の悲惨〕ということがよく分るんです。だから「さいわいなるかな」という福音・原福音のこだまにこちらの躰がなると、今まで知っていたのとは全然違った悲しみ〔神の悲しみ・慈悲〕が湧いてくるんです。特に何か、特別に悪い人がいた、自分がどうかしたということになしに、「さいわいなるかな」ということが無条件に言われているように、「悲しむ」・「悲しみ」ということが、人間に起ってくるのです。その悲しみというのは、他の何か特別なものがない、欠けている、ということによって起る悲しみではない。そうではなくて、全然次元の違う悲しみです、イエスの悲しみというものは、本当に祝福を受けて生れ

てきた人が本来自然であれば起らざるを得ない悲しみなんです³⁰。」と。

従って、「そういうふうには悲しむ人〔神の慈悲を行ずる人〕は、人間が本当に神様につくられたものとして、人間として本来自然に、幸せに生きる、健康に生きるということ、願う、祈る、そのために力を尽くさざるを得ないです。ですから、人間が天寿を全うしないで、事故だとか病気だとかいうことで死んでゆくということも、その悲しみの大事な一つの対象になるんです。そして死んでいったその悲しみを慰めるものは世の中には何もないということもちゃんと分るんです。だけれども、「さいわいなるかな」ということは動かないです。そうでないと（「さいわいなるかな」と言った、それと同時に出てくる悲しみ〔慈悲〕というものが基調にない場合には）、愛する人を失ったその悲しみというものは、必ずその不幸を増幅するようになる（その場合の人間の悲しみというものは死に導くということです。それは実際、そういうふう人間がなっていくということは、実は亡くなっていった人も喜ばないです³¹。）と。この場合、滝沢克己の念頭に「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない救^{すくい}を得させる悔い改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせる（Ⅱコリ七・一〇）」ということが、あったかもしれない。

そして「〔彼らは慰められるであろう〕ということ、そういうことです。だから、「さいわいなるかな」ということから起ってくる悲しみが基調になっているということは、今まで知らなかった慰めを世界の内部にも見出すということです。今までは“なんだこんなことがあったって結局つまらんじゃないか”とか、そういうふうにごっか依怙^{いこじ}地になったり、なんかこう威張ってみたくなったりした、そういうことがなくなるんです。そして、今まではそんなふうにして、大事と思わなかった人間の愛情とか、死んでいった人のこととかそういうことが今までになかったように、やはり大事なことになるのです。それは、だから慰めです。やはり、「さいわいなるかな」ということから起ってくる・そして今まではそれが欠けていたために本当に慰めにならなかった・慰めに、人間の世界というものはやっぱり満ちている、ということも分ってくるんです。だから、正確に人間の世界を見る、受けいれると（いう）、その中で生きていくというのには、どうしても「さいわいなるかな、悲しむ者。その人は慰められん」と（いう）、こういうことがごっか分っていないと、分ってこない、いけないだろうということです³²」と。つまり「正確に人間の世界を見る、受けいれる」ということは「インマヌエルの原事実」に根を下ろすということであり、その「さいわいなるかな」という「恵みの場所」に気づくと、同時に人間の悲惨さについての「慈悲」がリアルなこととして理解されてくる。そしてこの「恵みの場」から出てくる慈悲が基調になっている限り実際に悲しむということが起っても、それが絶化されるこ

とがないし、また人間の世界には「さいわいなるかな」ということから起ってくる慰めに満ちているということも分ってくるというのだ。

「さいわいなるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん」（五・五）について。

「『さいわいなるかな、柔和なる者』というのもやはり同様なことです³³⁾」と。つまり、「『さいわいなるかな』ということが先にあって、いつも新しい一つのところから、すべて「心の貧しい人」ということも「悲しんでいる人」ということも「柔和な人」ということも、全部言われているということです。まず第一に「さいわいなるかな」という言葉が出てくる、それが分節するとういうことになるのです³⁴⁾」と言われている様に、滝沢克己は「さいわいなるかな」という恵みの場に「柔和そのもの」があると言う。実際にそこには敵対する人間に対する「敵を愛する愛」があるし、罪なる人間に対する無条件の「赦し」、罪からの「救済」があるし、さらに人間を支え・生かす願いである親切な「和解」があるし、人間を神のところに存在することを許す「創造力」があり、人間を生きた者とする「生命そのもの」・「光そのもの」があるのである。この「さいわいなるかな」が分節したものが「柔和なる人」ということである。そしてこの「柔和なる人」がどういう人かということは、「さいわいなるかな」を負って生きられた「イエスの場合をよく見詰めてみるとはつきり分ることです」と滝沢克己は言う。即ち、「『柔和』ということも色々、一言でいいますけれども、一般的に柔和ということはないので、これは、柔和とそれから戦闘心旺盛なのと、どっちがいいかというような問題ではないのです。そういうことを言えば、イエスは柔和な人でしたけれども、しかし闘志旺盛で、本当に火の出るような活動をした、闘いをした人です。だから「さいわいなるかな、柔和なる人」³⁵⁾。」と。そして「その人は地を嗣がん」について、滝沢克己は次のように解釈する。「『地を嗣ぐ』ということは、本当にこの地上を与えられたもの、この地上で、ほんとうに喜んで生きるということです。そういうふうに地上に本当に喜んで生きるということは、「さいわいなるかな」ということを初めに聞かなければ、これはできないです。そうでなければ、「地を嗣ごう」として地を滅してしまふ、地を荒廃させてしまうことになる。それは、地上に生きるということが本当の喜びにならないです、与えられているということを喜ぶということにはならない（です）³⁶⁾」と。つまり、「さいわいなるかな」を何よりも先に聞く」ということは、「世界は神の世界だ、我々は僕だ³⁷⁾」という根源的な事実を承認することであるのだ。

次に、「さいわいなるかな、義に飢え渴く者。その人は飽くことを得ん。」（五・六）について。

「『さいわいなるかな』、だからそこに、「義に飢え渴く者。その人は飽くことを得

ん。」ということが出てくるわけです。その「義に飢え渴く」というのは、世界の内部の諸関係とは全然違うんです。ここで言っている「義」というのは、人間の存在は貧しいものだということです。だから人間が主体ではない、(人間は)神の僕しもべだというそこに人間の正しさの源〔神の義〕があるわけですから、——人間が人間として正しく生きるということはそこを踏まえなければできない、そこからしか出てきませんから——(「義に飢え渴く」ということは)その人間の正しさの源〔「さいわいなるかな」〕を受けたいと、源から口をつけてその息を吹きたいと、そして本当にホッと息をしたいということです。だから、「さいわいなるかな」と言われるそれを聞く人は、必ずそれは「義に飢え渴く」ということになるんです。「柔和」だけれども、「さいわいなるかな」という言葉が出てくるその神の義が、世界に溢れるようにということ、義に渴くということはそれを飲むことです。そして、その人は必ず「飽くことを得ん」。そして、それは「義」が実際(にある)・「義」の泉が実在する、そこから飲もう・いただくというわけですから、それは「飽くことを得ん」です。これは本当に「飽くことを得ん」と、まだ欠けているということのない充足と生命の充実と、いうものを味わうことができるだろう³⁸⁾と。

さらに、「さいわいなるかな、あわれみある者。その人はあわれみを得ん。さいわいなるかな、心の清き者。その人は神を見ん。さいわいなるかな、平和ならしむる者。その人は神の子となえられん」(五・七一九)について。

「あわれみ憐憫ある者」というのも、「悲しむ者」というのを、他の人に対して・対する面
で言われたことと考えればいいです。それから、「さいわいなるかな、心の清き者。」この「心の清き者」とは、我々の心っていうのは余計な思い煩いに満ちてますから、そういう我々の恣意というものがすっかり消されたところから生きている人、という意味です。だから、そういう思いが実際消されているそこ〔恵みの場所〕を踏えて、そこから生きる人。だから、この祝福(「さいわいなるかな」)を負うて生きる人は、心のこだわりや、食欲というものから解放されるということです。「その人は神を見ん」と。実際神はそこにいるわけですから、神が来ているそこがこの地上ですから、自分のいるところですから、「その人は神を見ん」です。「さいわいなるかな、平和ならしむる者。」これは、本当に「義に飢えかまく」・そういうふうに「悲しむ」・そういうふうに人を「憐れむ」ということは、本当に平和が実際に人間の世界に、また一人の人の心に訪れるということと、一つのことです。「平和ならしむる」ということは、これ(「義に飢え渴く」「悲しむ」「憐れむ」)が欠けたらできない、これが欠けている限りは、「平和のための軍備」なんて言ったって、それはできないということでしょう³⁹⁾と。

最後に、「さいわいなるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各種の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。」（五・一〇—一二）について。

「[さいわいなるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。]」ここには、柔和なる者の闘いが必然的、悲しみが避けがたいように、[義のための]闘いが必然的だということも、ここにちゃんと出てくるのです。それから、「我がために、人汝らを罵り、また責め、詐りて各種な悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。」というのは、「我がために」とここにあるから、イエスがこれを言っているわけですから、解釈者（田川建三）によっては、マタイは自分の方の教団、エルサレムのキリスト教会が非常に大事になって、当時のユダヤ教会に対して近親憎悪で非常な憎悪を抱いている——向うからも憎まれているわけです——、それで教団の団結を強化し、教勢を強化・拡大するためにこういうことをここに入れたんだと、言うのです。しかし、「わたしのために」と言うのは、こういう言葉（イエスが「しかしわたしは言う」と言ったこと）が出てきているそこからイエスの言葉は出てきていますから、その「イエスのために」ということは、そのイエスがそこに生きている同じところに「恵み場所」イエスと共に生きないで、「イエスのために」生きるとか、イエスに倣うとかいうことはできません。だから「わたしのために」というのは、本当に、生命の・隠れてはいるけれども・絶対に確かな足場から生きて、ずっと言ってきたようなふう生きる者[義に飢え渴く・悲しむ・憐れむ者]は、普通の世の中から敵視されると・責められると、いろいろ悪く言われる——“あれは気が狂っている”とか“あれは偏っている”とか“あれは独り善がりだ”とか、いろんなことを言われます——ということ、これは避けがたいことで、だからその時にもやはり喜んでいい、さいわいだ、ということです。それで「喜び喜べ」、小躍りしてよろこぶ、というんです。後の方には「天にて汝らの報いは大なり。汝らより前にありし預言者たちをも斯く責めたりき」と。預言者たちというのは、イエスのように「しかしわたしは言う」というところまで神様との縁・結びつきというものを身近なものとして直覚するということはできませんでしたが、しかしやはりそこから預言者たちの言葉というものは出てくるわけです。だからその元のことをまるで忘れ果てて自分たちの持物——宗教も含めて——に固執している人たちからは、そんなふうには虐げられるということと⁴⁰⁾と。

そして、「天にて汝らの報いは大なり」について、滝沢克己は、その解釈に際し、その言葉が未来のこととして言われていることを注目し、そのことが「インマヌエル

の原事実」に含まれている逆にできない神と人との区別と順序にかかわることであり、聖書の非常に微妙な表現、即事的な正確な表現であるとする。「ここでちょっと問題になるのは、「天にて汝らの報いは大なり」とありますから、いわゆる因果応報説で、勸善懲惡説でないかというふうにもとれるんですが、勸善懲惡説と普通言うのは、いわゆる道德というものを固定しておいて、それですべてが押し切れるということですけども、そういうことではないのです。（ここには、時の内部で何かして、それから後で報いを得るといふ、そういうのとは全然違った関係がある。）これは、神様が来ているということ、神様の手に人間はいる、その視線の下にいて、その神様が我々が嘆く「或は喜ぶ、悲しむ」に先だって嘆いている「或は喜んで、悲しんでいる」、ということです。（いつでも神様との絶対的な順序、絶対に逆にならないことがある。）その神様の憐れみ・恵み・励まし・赦しを素直に受けて立つということは、こちらの応答です、我々の耳に聞えない福音に対する我々の方の応答です。（「喜びよろこぶ」ということが正しい反響です。「さいわいなるかな」ということを本当に聞き分けると悲しみが起ってくる。しかしそれは既に、慰めのある悲しみです。）その応答は正しい応答ですが、その応答が正しい限りは、その人は必ず既に報いられて「現在のこととして報いられる」、その意味では、報いを受けるであろうという未来のこと、前の方にも「慰められるであろう」というふうに未来になっていて、ここにも「汝らの報いは大なり」というふうに「未来のこととして」「報い」ということが出てくるんです。（現在のことですけども絶対に逆にならないことがそこにあるんです。それで未来の形であらわされる、「報いを得ん」[或は「慰められん」]というようなことが言われるわけです。今起ることなんですけれども、それはこっちの手には決して取り込むことができないのです。[[「喜びよろこぶ」或は「慰めのある悲しみ」ということがいったん起っても、それを保って持続するというようなことはできない。いつでも神様との関係（絶対的な順序）があって、「さいわいなるかな」ということを向こうから言ってくれてると。] 向こうから来ることなんです。どこまでも向こうから来るということがなくならぬのです。（その応答を神様は喜び給うている。その主が喜んでくださるということ。「それでいいよ」ということを言ってくださるということ。）だから「慰められん」「報いを得ん」ということが向こうから来るものんだということがなくならない、ということが大事なんです。それがなくなってしまうとそれはもう駄目です。（我々の信や感情の純粹さというものが、何時の間にか自己目的化して持物にならないためには、「報いを得ん」ということが徒にいたづら言われていることではないということが分らないといけないうのです。人間というものは、主の僕しもべであり、幼い子どもにすぎないという、その区別（二重性）・人間の限界が超えられ

るということではないし、そういうことが抜けてしまうと、これは、人間にこれからすること・すべきこと、そしてすればそれだけ面白いこと、いくらしてもしたりないというほどに人間の世界・人間の生というものは豊かだということ、そういうことが分らなくなっちゃうんです。）で、はっきりこういうことが、（非常に微妙な表現ですけども、聖書の表現というのは実に正確なんです。だから、「太初に言^{ことば}ありき」ということと、それから「必ず報いを得ん」という未来の形です、それだから聖書でいう終末の日とは、それを言うわけです。時の始めが同時に時の終りで、いつでも人間は時の中に生きている。そうすると、終りというものは、決してこちらに取りこむことができない、向こうからいつも来るものなのです。）言われているわけです⁴¹⁾、」と。我々は、「山上の説教」の冒頭についての滝沢克己の解釈——どこまでも「インマヌエルの原事実」（「さいわいなるかな」）に即した、それを先立てた、厳密に即事的なものであり、また「インマヌエルの原事実」に含まれている論理に即した、厳密に弁証法的なものであり、漠然と神を信ずるということではなく、「インマヌエルの原事実」に信頼するという意味での真実の信仰である——を聞いた。

三.

さて、我々は、K.バルト＝E.トゥルナイゼンの「山上の説教」の「さいわいなるかな」（五・一一二）についての解釈を、『教会教義学 神論 II／3 神の誡め⁴²⁾』及び『教会教義学 和解論 II／2 主としての僕イエス・キリスト 上く2>⁴³⁾』に即して、聞くことにする。もっとも前者に出てくるバルト＝トゥルナイゼンのその解釈については本論文の冒頭において、その滝沢克己による要約を見てきたのであるが、改めてK.バルトのテキストに即して検討する。

バルト＝トゥルナイゼンの「山上の説教」についての解釈の視点は次のことに置かれている。「人は、あのテキストの内容を決定的に、旧約聖書の予言の成就として、イエスご自身の人格の中で近づいた神の国への特別な指し示しの中に探し求めなければならないということ⁴⁴⁾」である。何故ならば、「イエスの人格へと、山上の説教は、われわれの注意を向けさせようとしている。換言すれば、この人格の事柄^{ザッヘ}——それから確かにまさに、それこそがすべての人間的な行動の中で根源的に問題であり、また最終的に問題でなければならない事柄^{ザッヘ}として示される（この人格の）事柄^{ザッヘ}——へと、われわれの注意をむけているのである⁴⁵⁾」からである。その「事柄^{ザッヘ}」について、バルトは次のように語る。「山上の説教は、全新約聖書と同じように、その場所（み国、イエス、新しい人間がそこで示される場所であり、そこで置かれる基礎であ

る⁴⁶⁾の⁴⁶⁾ことを〔既に〕与えられた場所として表示し、記述する。十誠が、どこで人間は神の前で、神と共に、立つことがゆるされ、立つべきであるかを語る時、山上の説教の方は、彼〔人間〕は神の行為を通して実際にそのところに置かれている（イエスはその奉仕の力によって、神と人間の間の仲保者として支配し給うということ⁴⁶⁾）と語る⁴⁷⁾と。そして「神の行為を通して」つまりイエスの十字架の死と復活を通して、実現した（メシヤ自身が、その死とその蘇えりが、はじめて、ただそれだけが、律法を成就することができ、また、成就するであろう。換言すれば、〔律法を〕実現された生の秩序として、その人格の中で舞台上に登場させ、そのことによって、その民を正し、神と共に生きるその民の生のまことの始まりとして、罪の赦しを啓示すであろう。）⁴⁸⁾その「^{ザッヘ}事実」を次の様にバルトは詳述する。「天国はまだきておらず、ただ近づいただけであるように見える。ただ未来のこととして、人間の生の場の中に立っているように見る。この、確かに強力で、重大な結果を伴う外観のことを山上の説教は（マタイ五・四以下）、次のこと——それが悲しんでいる人たちについて、彼らは慰められるであろうと語り、柔和な人たちについて、彼らは地を受けつぐであろうと語り、義に飢えかわいている人たちについて、彼らは飽き足りるようになるであろう、等々と語ること——によって、考慮に入れている。この外観が単なる外観でしかないということ、そのことを山上の説教は（五・三、一〇）、次のこと——それが決定的なこと、また実際に介入してきたことを、未来のこととしてではなく現在のこととして語り、こころの貧しい人たちについて、天国は彼らのものであると語り、また、義のために迫害されてきた人たちについて、天国は彼らのものであると語ること——によって、証ししている。宣べ伝えを聞き、信じる者たち、換言すれば、世界の状況全体の、それと共に人間の状況全体のこれから来たらんとしている変化ではなく、既に現実に遂行された徹底的变化を、完全に実行された神々のたそがれを、天から雷光のように悪魔^{サタン}が落ちるのを、見る者たち、その者たちはこの変化に基づいて生き始めるのである。彼らが、自分たちに対して宣教を通して約束されることのことを聞くことによって、彼らはそれを既にもっているのである。彼らが、天国は彼らの直接近くに〔移されて〕来たということを理解することによって、彼らは既にその市民へと、またすべてのその市民としての権利と義務にあずかるようにと、招かれているのであり、既に、み国の宣べ伝えに積極的に参与しているのであり、それ故（五・一三以下）、あなたがたは地の塩であり、世の光であり、彼らは（彼ら自身の証しをもって）、来たりつつあり、既に来た天国の〔代表〕指数である。したがって山上の説教の新しい人間は、現実的な実在である。この人間は、イエスがそこにおられることによって、——しかし、ただ単にご自分のためにそこにおられだけでなく、み国の使者、告知者

として、み国をもたらしものとして、権威（ἐξουσία）をもってみ国について語る（七・二九）（なぜならば、そのことは彼の権利であり、彼は〔その中で〕すべての人間的な〔勢力〕範囲に対し、み国が隣り合って存在するようになることが出来事となって起こった方であるゆえに、権威をもってみ国について語る）者として、そこにおられることによって——また、イエスがこの権威の中で、ほかの实在の人間〔たち〕に向かつて語られることによって、現在のな实在である。イエスがそのことをなし給うことにより、イエスがこれらの人間によって聞かれ信じられることにより、み国は現実となり、今、ここで既に、あの外観に抗しつつ、あの外観が単に外観でしかないことを暴露しつつ、天国における人間的な生が存在する。「わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう」（七・二四）。イエスの言葉を聞いて行う時、聞いて行うことによって、人間が、そのような者であるのである⁴⁹⁾。」と。キリストであるイエスが来られて、十字架の死と甦りによって、世界の状況全体・人間の状況全体の徹底的な変化を現実に遂行された、天国が世界・人間の直接近くに來た、つまりイエスによってインマヌエルの原事実が成立した、出来事となった、現実となった、というのである。バルト＝トゥルナイゼンは、このキリスト論に基づいて、イエス・キリストによって成立し、实在となった「インマヌエルの原事実」を視点として、「山上の説教」の解釈を行うのである。

五・三、八について。「山上の説教の中で要求されている人間の義は、客観的に、イエスが彼をご自分に属するものとして知り給うということ（ご自分との真実関係）、主観的に、彼が事実、イエスに属するものであるということから成り立っている。イエスが人間に対して〔ご自分との真実関係を〕公に〔責任もって〕言明なさるイエスの告白が人間の正しさを決定するのであって、人間の生や言葉が決定するのではない〔マタイ七・二一―二三〕。しかしまた、イエスを告白する人間の告白が、人間の正しさについて決定するのでもない——それがまさにイエス〔神の国〕の中で現われ、力を発揮する神の恵みに対する告白でないならば。しかしこのまことの告白こそが、それ自身、恵みである。まさにそのような告白のことを、その内容を堅くとして放さないでいる者は誰も（「主よ、主よ……わたしたちはしたでありますか」）誇ろうとはしないであろう。それゆえに、山上の説教は（五・三）こころの貧しい人たちのことを、換言すれば、まさに霊を通して、自分自身では貧しいものであることを、徹頭徹尾欠乏しており、無能であり、ただ、彼らをさいわいなりと語り給う方の中でだけ豊かで、強くあることを確信させられたものたちのことを、さいわいであると讚美する言葉をもって始まっている。からだ全体のあかりである「澄んだ目」（六・二二）、神を見るであろうとの約束をもっている「清い心」（五・八）とは、イエスの決断と言葉で満

足し、彼に対してこの決断を通して与えようと約束された生を、すすんで生きようとしている者の即事性のことである。このことをすることは（七・一三以下）狭い門からはいり、狭い道を行くことである。なぜとって、すべてほかのこのの方が、このこと——あの「澄んだ目」とあの「清い心」をもつこと、換言すれば、すべてをイエスの決断と言葉のままに決定し、したがって、安んじてこころの貧しいあの民に組し、それを告白する者の即事性——よりももっと身近であるからである。自分自身からして約束をつかもうとする高慢さ、律法を自ら成就したいと思う妄想、自分のことを健康だと思い、それゆえに、医者が必要としないと考える病人の悪い思い違いは、この狭い門の傍を繰り返し過ぎて行くであろう。山上の説教の（既に成就された）約束全体とその脅かし全体は、この一つのところに、こころの貧しい人たちのこの狭い門に、この狭い道に集中されている。「それを見い出す者が少ない」。他方、広い門と広い道は、多くのものたちがそこを進み行くのである。多くの者たちに対する少数の者のこの関係の中で映し出されているものは、すべてのもののために律法を成就されたひとりの方の独一無比性である。そこで要求されている義は、彼、あのひとりの方の義であり、彼、このひとりの方、自身が彼によって要求された義であり、したがってその義はその本質からして、この最高に特別なものであるのである。そのような者——そのものためにこのひとりの方がい給うそのような者——の現実存在は、常にただ、九死に一生を得た者の現実存在であることができ、事実またそのような現実存在であるであろう。そのようなものの生を生きることがゆるされ、新しいイスラエル、新しい人間（エレミア三一章）であるということ、[そのものに対して] 彼が神の前で神と共に、生きることがゆるされる場所がただ単に指し示されているだけでなく、むしろこの場所に実際に足を踏み入れ、その場所を占めた人間であるということは、恵みであり、選びである。まさにこの恵み、この選びを山上の説教は宣べ伝える。なぜならばそれはイエスの山上の説教であり、助けに満ちた神的な義としての、み国の担い手、もたらず者、使者としての、その人格の告げ知らせとしてのイエスの、山上の説教であるからである⁵⁰」と。

従って、バルトは、「幸いなるかな」ということが、個々の限定（心の貧しい者、悲しむ者、柔和なる者、義に飢え渴く者、^{あわれみ}憐憫ある者、心の清き者、平和ならしむる者、義のために責められたる者、）よりも単純に、無条件に最初に置かれている理由を、そしてその意味している事柄を、次のように解釈する。「マタイ及びルカにおける「さいわいである」という言葉の繰り返しが「山上の説教」ないし「平野の説教」において、特にその最初のところに置かれているという事実である。そのことは、そのようなイエス御自身の語り給うた「さいわいである」という御言葉が、その神の国

宣教の基礎的な御言葉として、伝承に刻印を与えたということを意味している。しかし、この表現形式が福音書に用いられる際の決定的・即事的な独自性は、^レ「さいわいである」と言われた人々の状況も彼らがそのように言われる理由も、近くに迫っている^レ神の国によって、作り出され条件づけられている」という点である。従って、この讃辞は、イエス（「神の国」）の現臨によって基礎づけられたそれらの人々の状況[イエスによる世界の状況・人間の状況の徹底的な変化、イエスによる「インマヌエルの原事実」の成立・現実的成就]を、彼らにとってのその意義・約束と共に、言い表し、叙述したものである。これらの人々は、イエスがそこにいましたがゆえに、またそのことが彼らにもたらしたもののために、「さいわいである」と言われるのである⁵¹⁾。つまり「<彼らは、その置かれた外的・内的状況のゆえに、またその状況が彼らに対して持っている意味に眼を注ぐ場合に、幸福であり、彼らの現実存在はそのような意味で卓越した現実存在として賞讃さるべきだ>ということをそれらの御言葉は、語っている⁵²⁾」のである、と。さらに「新約聖書における「さいわいである」という賞讃の言葉は、神の国のさいわいについて語っている。従って、それらの言葉は、それが語りかけられる人々に、彼らにとってはまったく新しいあるものを告げるのである。従って、それらは、王的人間[救い主]としてこの新しいものをもたらし、自らその新しいものであり給う方によってだけ、語られるのである。すなわち、神の啓示の御業として彼らのためにいまして「あなたがたはさいわいである」という彼ら自身には知り得ない彼ら自身についての知識を全権をもって彼ら自身の名において与え得給う、^{かしら}首であり、「救主」(σωτήρ)である方——そのような方によってだけ、それらの言葉は、語られるのである。彼だけが、この人間的言葉の語り手であり得給う。すなわち、彼は、この言葉であり給うのである⁵³⁾」と。即ち、バルトは、イエスをヨハネ福音書の冒頭の「初めに言があった」(一・一)の「言」の完全な表現・映しと、換言すれば「インマヌエルの原事実」の完全な現われ・体現と、倣しているのである。従って、そのイエスの言う「さいわいなるかな」といった事柄とは、その「言」・その「インマヌエルの原事実」から出てきた諸々の言葉であるのだ。

五・七―九について。「マタイ一三・一六で弟子たちの目や耳が「さいわいである」と言われるのは、彼らが見るものを見、彼らが聞くものを聞くからである。それらすべての人々がその目・耳・心・手・信仰・業で行なうことは、何の関連もなしに起こることではなくて、実に明確な関連において起こる。すなわち、彼らは、直接或は間接的に、イエスによって[天国であり、救い主であり、新しい人間であるイエスによって]、そのような行為へと召喚され、資格づけられ、任ぜられ、導かれたのである。そして彼らがそのような者であるということは、彼らの行為において、あらわと

なる。それゆえに、彼らの行為に目を留めて、「さいわいである」と彼らに向かって語られる。すなわち、彼らの状態は良しと告げられ、喜びを持つべきあらゆる理由が彼らにはあると告げられる。彼らがその志向と行為において神の子として己れを示すときに、彼らは、喜びを——最上の喜びを持つことができる。また、そうあることが許されるし、そうあるべきである。それは、もちろん自分の行為が特別に道徳的であるとか誉れ高いものであるとかいうことを考えてのことではなくて、自分の行為が生まれて来るその根源〔神の国〕を考えたことである。福音書において人間の行為が「さいわいである」といわれている御言葉を、以上のように理解せざるを得ないように強い、その客観的な重要さのゆえに他の個所の理解にとっても規範的な個所は、マタイ一六・一七である。すなわち、ペテロは（それは最高の人間的行為の精髓であったのであるが）「メシヤ告白」を語った。そしてそれに対して、イエスは、マカリスム（Makarismus）をもって答えて「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである」と語り給う。そのように言われるのは、ペテロがそのように語るゆえに起こるのではない。そうでなくて、「あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいます父である」からである。ペテロはそのことに基づいて語らしめられているからである。従って、告白する者は、その告白のゆえに「さいわい」なのではなく、その告白がそのような根源〔神の国〕を持っているゆえに「さいわい」なのである。信ずる者、憐れみある者・心の清い者・平和をつくり出す者・目覚めている者等々の「さいわい」についても、事情は同様であろう。そのような者であり、そのように行動する人々に「さいわい」が告げられる場合の、その力と確かさも、そこから生まれて来るのである⁵⁴⁾と。要するに「或る種の人々がそのことのゆえに「さいわいな者たち（μακάριοι）と称ばれている考え方や行動の仕方は神の国に基づいて呼び起こされ・動かされ・規定され・方向づけられているのである⁵⁵⁾」のだ。そしてこの「神の国に基づいて」ということは、ペテロの信仰告白の「あなたにこのことをあらわしたのは、血肉ではなく、天にいます父である」ということが「根源」といわれているので、神の国の働き・救い主の働きに基づいてということであり、実在としての・場所としての・人間の絶対的限界としての神の国に基づいてということでないようである。

五・三一六について。「さいわい」であるという賞讃が第一の場合のように或る種の人々の行為に対して語られずに、端的にその状態、否、その苦しみに対して語られている一連の個所において、（神の国・天の父の働きを根源に持っているゆえに「さいわい」なのであるという意味が）一層明瞭である。その場合、もちろんまず考えられるのは、マタイ五・三以下に繰り返されている「さいわいである」という賞讃の言葉のうち最初の四つのものである。心の貧しい人たち、悲しんでいる人たち、卑しめ

られた人たち ($\pi\rho\alpha\epsilon\iota\varsigma$) [協会訳「柔和な人たち」、義に飢えかわいている人たちは、さいわいであると、言われている。彼らが貧しい者・悲しむ者・卑しめられた者・すべての義を失いそれを求めている者であるということは、単に彼らの状態というにすぎない、彼らの経験というにすぎない。ここにこれらの人々の状態として述べられているものが、それ自身において喜ばしいもの・望ましいものという性格を少しも持っていないということは明らかである。しかしまた、これらの賞讃の言葉の対象が、何か他の隠された内在的価値を持っているようなことでもない。「さいわいである」という御言葉は、外見的に悲惨な人々についてではなく、真に悲惨な人々について、語られているのである。また、それは、彼らの悲惨を抽象的に見たり真空の中で見たりすることなく、一定の関連の中で見ているのである。すなわち、それは、それらの悲惨な人々に目を注ぎつつ、彼ら（苦しんでいる彼らも）神の国に直面しているということを考え、彼イエスから（われわれは今やそう言わなければならないが）、明確な光が、彼らによってもたらされたのでもなければ望まれたのでもなく欲せられたのでもない状況の上に落ちているということを考え、彼らの喜ばしくはない消極的なすでに死のにおいしている状況の上にそのような光が落ちているということ考えたのである。彼らは、その悲惨の中であって、神の国に直面し、人間イエスによって革新さるべき世界のふちに立っているのである。彼らの悲惨において、そのような世界の破れ（致命的な傷）は現われ、世界はいわば透明となるのである。悲惨な人々の現実存在そのものにおいてこそ、世界は透明となる。そして、彼御自身が一人の悲惨な人間として——すべての人々の中で最も悲惨な人間として来たり、行動し、啓示され、悲惨な人々に味方して来たり、行動し、啓示され給うたのが、いたずらなことでなかったことによって、あの貧しい人々・苦しみを負う人々・卑しめられた人々等々の現実存在においてこそ、神における新しい事実は、古い人間の生活領域全体の中に輝きわたる。ルカ六・二四以下で「幸福な人々」に対して語られた「わざわいだ」という御言葉は、告発ではなくて、アブラハムのふところにいるラザロと対照された^{よみ}黄泉における金持のように、彼らが実際に憐れむべき人々だということを、確言しているにすぎない。それは、彼らの現実存在においては、御国の近いこと、イエスの現臨が認められないからである。たしかに、悲惨な人々も、彼らの存在がそのような透明性を持つということに対して、御国が——イエスが、彼らに対してこそ実際に近いということに対して、何ごとをすることもできない。「さいわいである」という彼らに対する賞讃の言葉も、彼らの状況を下からではなく上から特徴づける客観的事実 [神における新しい事実] ^{ジュンテューティッシュ}について語る総合的な言葉 [神の国・イエスとの関係において語られた言葉] ^{アナリ्यूティッシュ}であって、分析的な言葉ではない。従って、彼らとその悲惨に目を

注いで「さいわいである」と賞讃される場合も、まったく新しい事実が告げられているのである。彼らがイエスのあの光の中に生きるということ——それを作り出すのは彼らではなく、またそれがどれほど甚しいものであっても彼らの悲惨でもない。ただ事実そのようであるというに過ぎず、従って、彼らは、「貧しい人々は福音を聞かされている」(マタイ一・五)という風に、単純に彼らの悲惨によって示されているもののゆえに、「さいわいである」と賞讃されているにすぎない⁵⁶⁾と。要するに、「あの貧しい人々・苦しみを担う人々・卑しめられた人々等の現実存在においてこそ、神における新しい事実〔御国の近いこと、イエスの現臨〕は、古い人間の生活領域全体の中に輝きわたる」のであるから、彼らは「さいわいである」と言われているのである。ここでも「神の国に基づいて」という意味は神の国の働き・メシヤとしてのイエスの働きに基づいてということであり、実在としての・場所としての神の国に基づいてということでないようである。

五・一〇—二について、「さいわいであるという賞讃の第三のグループのこと、この種の賞讃の言葉が語りかけられている人々は、これまで述べた二種類の賞讃の言葉が語りかけられている行為する人々と苦しむ人々の間に立っており、彼らの中間のところに、或は彼らを超えた高いところに立っていると、言うべきであろうか。そしてわれわれがこれまで二種類の賞讃の言葉について行なわれて来た解釈〔神の国・イエスをその根源に持っているが故に「さいわい」であると賞讃されているのだという解釈〕以外の解釈が不可能だということは、彼らについてこそ明らかである。マタイ五・一〇以下、ルカ六・二二で、しかしⅡペテロ三・一四、四・一四でも、義のため・イエスの御名のため・イエス御自身のために迫害され、悪口を言われ、排斥され、憎まれ、除外される人々が、「さいわいである」と賞讃されている。ここで注目されている人々は、明らかに行為する者であると同時に苦しむ者であって、前者と後者のひそかな関連を示している。彼らは、天国の義を告白し、イエスを告白するのであるから、行為する者であるが、しかしそのような行為によって迫害・侮り・憎しみを身に招くのであるから、苦しまなければならぬ。従って、彼らは、いわば特別な意味での行為する者であり、特別な意味で苦しむ者である。そのような状況が彼らによって作り出されたのではないということは明らかであるが、しかしそのような状況の基礎は、(まったく直接的に)イエスと彼らの間の極めて特別な関係である。そして、この場合にも、そのような状況が彼らに苦しみをもたらすものである限り、望ましい状況でないということは明らかである。苦しみというものは、この関連においても、喜びではないのである。「さいわいである」という賞讃は、この場合にも、分析的な言葉ではなくて、総合的な言葉である。彼らはイエスを否むことができないのであるか

ら、「キリストの苦しみにあずか」る（I ペテロ四・一三）ということのを免れることはできず、拒むこともできない。彼らは、直接に、イエスの十字架の陰の中に生きている。しかし、それこそ、彼らの状況を約束に充ちたものにするものであり、明確に天国における状況にするものである。そして、イエスは、そのような状況に目を留めて、（それはイエス御自身の状況に隣接する状況であるから）それを歎くことをせず、むしろ「さいわいである」と語り、この場合には他の場合にもましてはるかに強い調子で（「喜び、よろこべ」）「さいわいである」と、賞讃し給うのである。あの行為する人々のさいわいとあの苦しむ人々のさいわいは、イエスのために迫害される人々のさいわいの中に、いわば重畳される。なぜかと言えば、彼らは、その行為のゆえに苦しむ者であると共に、その苦しみにいて特別に行為する者であるという、両者であるからである。殉教を賞讃するとか、殉教を喜ぶことを奨励するとかということが、問題の中心ではない。ここで行なわれているのは、殉教者たることを許され、御国の（イエス御自身の）証人たることを許され、そのような者として己れを確証し実証することを許された故に、殉教を忍ぶ人々の状況を、賞讃するということである。彼らは、そのために自分たちに与えられている特別な自由によって、さいわいなのである。そのような特別な自由をこそ、彼らは、「さいわいである」と称ばれることによって、喜べと命ぜられているのである⁵⁷⁾と。

最後に、バルトは、事情がそうであるのは「イエスの御言葉だからである」と諦め括る。「我々がなお確定しなければならないのは、それらすべての人々に、真に喜びの使信がもたらされるということである。神の国は汝らの只中にあると言われた人々全体に喜びの使信がもたらされるということである。新約聖書における「さいわいである」という賞讃は、何ら空虚な逆理ではない。それは、それが告げられる人々を目指すのであって、そのかたわらを通りすぎてゆくのではない。そしてまた、それは、それらの人々に、暗やみの中に行くことを命じはしない。それは、首尾一貫して明白に、さいわい・生命・喜びを、約束する。それは、それがイエスによって——「救主」（σωτήρ）によって語られた「さいわいである」という賞讃の言葉だからである。それが、力強い憐れみである彼の憐れみの御言葉だからである。それが、彼御自身に関連する御言葉であり、彼において近づき来た神の国に関連する御言葉だからである。彼は、いたずらに彼らの中央にいますのではない。御国は、いたずらに彼らに近づき来たったのではない。そのような事実は、彼らの現実存在にとって、さいわい・生命・喜びという意味を持っている。それは、約束として——そしてその約束に隠されつつすでに現代的な成就として、彼らの現実存在の最も実在的で決定的な規定である。たしかに、それは、彼らの現実存在の「終末論的」規定、すなわち、彼らの現実

存在において啓示さるべき規定であるが、しかし、それは、何よりもそのキリスト論的規定であり、御国に基づく規定であって、彼らにとって決して彼岸的なものというにとどまらず、それが彼らに与えられるとき、それは此岸的な規定となる。イエスによって語られた「さいわいである」という御言葉は、彼がそのようなすべての人間の主であるということ語り、従って、〈彼らの行為も、それが彼によって動かされ指示されたものである限りは、空しくなく、彼らの苦しみも、それが彼の光の中で苦しまれている限りは、空しくなく、ましてや、彼のための彼らの苦しみの行為も行為の苦しみも空しくはない〉ということ語る⁵⁸⁾。と。

——我々はK.バルトの「山上の説教」の冒頭の「さいわいなるかな」（五・一一二）についての独創的で、感銘深い解釈、弁証法的な・即事的な解釈を詳しく聞いた。我々は、これからその解釈を批評しなければならないが、我々にはすでに滝沢克己によるバルト＝トゥルナイゼンの思想・神学に対する批判を知っているので、それを手懸にして困難な批評を試みることにしたい。

K.バルトは、「イエスによって、」「イエスの人格の中で」「イエスの奉仕の力によって」「神と人間の結びつき・人間と神との結びつき」・「神と人間の間の生きた交わり」・「み国・イエス〔仲保者〕・新しい人間」が実在的・現実的・現在的なものとして成立した・実現した・出来事となった、と考えている。従って、「インマヌエルの原事実」よりも先に、その成立・実在化・現実化のための「救い主」の働き・キリストの働きがあり、そのイエスの・神の働きによって、「インマヌエルの原事実」（神と人間の間の生きた交わり）が実在的・現実的・現在的となったのである。つまり、「インマヌエルの原事実」が単純に、無条件に、太初に、世界と人間との成立の大前提として、実在した、と言うのではなく、人間イエス（その人格の中に神がいます）によって、その救い主としての働きに拠って「インマヌエルの原事実」が成立したというのである。それ故に、その限りにおいて、人間イエスと実在としての・場所としての・人間の絶対的限界としての「インマヌエルの原事実」との関係が曖昧となり、その関係から浮き上り、「インマヌエルの原事実」を通して働く神の働き、つまり神の働き・行為としての「インマヌエルの原事実」に於て人間イエスは実在するということになる、つまり人間イエスは同時に神の働きである、「まことの神にしてまことの人間」ということになる。換言すれば「インマヌエルの原事実」において父なる神と人間イエスは「子なる神」において一つである、「子なる神」を媒介して「父なる神」はその働き（聖霊）を人間イエス（世界）のなかに働きかけられる、従って「インマヌエルの原事実」に於ける「子なる神・キリスト」は人間イエスの絶対的限界であり、人間イ

エスは「子なる神・キリスト」において「父なる神」によって支えられ、「子の神・キリスト」を通して働く「父なる神」の働きによって生かされているのである。ところが、K.バルトは、「インマヌエルの原事実」における「子なる神・キリスト」が人間イエスの出現とともに、歴史の中に、人間イエスの人格の中に登場した・現臨したと考えるのである。つまり、人間イエスによって「インマヌエルの原事実」が成立した、イエスは「まことの神にしてまことの人である」というのである。従って、人間イエスの絶対的限界である「子なる神・キリスト」、場所・実在としての「子なる神・キリスト」があいまいとなり、バルトの場合「父なる神」の働き・行為としての「インマヌエルの原事実」ということにならざるをえないのである。場所としての「子なる神・キリスト」を通して、厳密に・即事的に、人間イエスのことと「父なる神」のことを規定するのではなく、人間イエスのなかに働いている「父なる神」の働きとしての「子なる神・キリスト」から、人間イエスや「父なる神」のことを規定しようとするのでイエスについて、曖昧に「まことの神でありまことの人である」としか規定することはできないのである。従って、バルトのこのような思考を前提とする限り、「イエスによって」「イエスの人格の中で」「神の国・イエス・新しい人間」は実在的・現実的・現在的と成った、という場合の「新しい人間」は、実在としての・場所としての・人間の絶対的限界としての神の国に於てあるものと見られるのではなく、神の働き・行為としての「神の国」に於てあるものとして見られざるをえなくなる。つまり「新しい人間であるということ、彼が神の前で神と共に、生きることがゆるされる場所がただ単に指し示されているだけでなく、むしろこの場所に実際に足を踏み入れ、その場所を占めた人間であるということは、恵みであり、選びである⁵⁹⁾。」と。神の働き・恵み・選びが強調されるが故に、「新しい人間」を「神の前で神と共に、生きることがゆるされる場所」と行為・働きにおいてとらえており、「神の前で神と共に生きることがゆるされる場所」というものが、人間がそこに於て限界づけられた、実在としての「場所」がその分曖昧になっているのである。また「山上の説教は、この完成の光の中での人間の状態〔立場〕の記述、言いかえたものである⁶⁰⁾」というその「新しい人間」についてバルトは次の様に語る。「これらの命令〔イエスによる人間の救いのための律法の成就のこと〕によって到達され、補足され、規定された人間は新しい人間——彼〔イエス〕に属する者たちの中でのイエス、その後に従う者たちの中でのイエス、彼によって語られた恵みの言葉を聞き、行う者たちの中でのイエス、み国のよりよい義（イエス自身がその義であり、イエス御自身それを宣べ伝え給うみ国のよりよい義）を認識し、把握した者たちの中でのイエス、彼らの中でのイエス、しかし彼らの中でのイエス、彼らに対して、彼によってなしとげられた律法

の成就への参与を与え給い、そのみ手から彼らがこの参与を受けとったイエス——である⁶¹⁾と、新しい人間＝イエスを「神の国」の働きの映しとして、その行為・活動・状態において見ており、決して実在としての・場所としての・人間の絶対的限界としての「神の国」に於て限定された現実存在として見ていないと言わざるをえない。「初めに言^{ことば}があった」(ヨハネ一・一)の如くに単純に、無条件に、「イエスによらない」、「インマヌエルの原事実」から出発し、実在としての・場所としての・人間の絶対的限界としての「インマヌエルの原事実」において限界づけられた人間を、その現実存在の場所から見る立場と、「イエスによる」「イエスの人格の中に」ある「インマヌエルの原事実」から、キリスト論の不徹底・イエスの人格の分析の不十分の故に、出発し、「神の働き・行為」としての「インマヌエルの原事実」によって限界づけられた人間を、その「神の働き」・「神の恵み」・「神の光」を映し出しているものとして人間を把握する立場とは——前者が滝沢克己のそれであり、後者がK.バルトのそれである——、まず第一に「さいわいなるかな」(五・三—二)に出てくる「さいわいなるかな」が事柄^{ザッヘ}として何を指し示しているかという点で、次に「心の貧しい者」・「悲しむ者」・「柔和なる者」・「義に飢え渴く者」・「憐れみある者」・「平和ならしめる者」・「義のために責められたる者」についての解釈という点で、異なつてこざるをえないのである。

まず、第一の点つまり「さいわいなるかな」をどうとらえるかということに関して、K.バルトは「神の賞讃」・「神の働き」を「さいわいなる事柄^{ザッヘ}」と解釈するが、滝沢克己は「イエスによらない」、単純に無条件に、太初から実在する「インマヌエルの原事実」を指し示す「さいわいなるかな」である、「インマヌエルの原事実」こそ人間・世界にとっての「さいわいなる事柄^{ザッヘ}」であると解釈するのである。

次に、第二の点について、「心の貧しき者」に関して、K.バルトはその「心の貧しき者」について、「まさに霊を通して、自分自身では貧しいものであることを、徹頭徹尾欠乏しており、無能であり、ただ、ただ、彼らをさいわいなりと語り給う方の中でだけ、豊かで、強くあることを確信させられたものたちのことを、さいわいであると賞讃する⁶²⁾」のであるとして、神の働きの映しとして人間をその行為・状態において把握しているのであり、人間の絶対的限界である「インマヌエルの原事実」から人間をとらえていないものである限り、抽象的な人間の理解である。それに対して、滝沢克己の「心の貧しき者」についての解釈は、「なんにも持たない者、自分の内にも外にも持物を持たないということ⁶³⁾」「本当に自分の主体性というものが絶たれているところ、だから“わたくし”というものが絶えたところで・絶えたところから生きている人⁶⁴⁾」「人間の主体性、身も心も含めて人間全体の主体性というものが全然ないところ、本来無一物⁶⁵⁾」ということで、「インマヌエルの原事実」に限界づけられ

た人間、自分の現実存在の場である「インマヌエルの原事実」に於てある人間（被造物）の本質的な規定である「何ものでもないもの」・「土のちり⁶⁶⁾」にすぎないものであることを、「心の貧しき者」と言っているのである。従って「天国はその人のものなり」ということも、「インマヌエルの原事実」・「神の国」に堅く根を下しているのであるから、貧しき者に神の国が属するということは即事的なこととして言えるのだ。

次に、「悲しむ者」について。K.バルトは「端的にその状態、否、その苦しみに対して語られている」ものであり、「[「さいわいである」]という御言葉は、外見的に悲惨な人々についてではなく、真に悲惨な人々について、語られたのである。また、それは、彼らの悲慘を抽象的に見たり真空の中で見たりすることはなく、一定の関連の中で見ているのである。すなわち、それは、それらの悲惨な人々に目を注ぎつつ、彼らも（苦しんでいる彼らも）神の国に直面しているということを考え」たのである⁶⁷⁾と解釈する。つまり「苦しんでいる者」「悲しんでいる者」というように「状態」として人間を把握しており、その苦しみの状態は、救い主の働きを待ち望んでいる状態である限り「神の国に直面している」のである。そして、バルトは、神の前で神と共に生きられたイエスについて、「彼御自身が一人の悲惨な人間として——すべての人々の中で最も悲惨な人間として来たり、行動し、啓示された⁶⁷⁾」方であると語り、人間イエスの悲惨な状態が、救い主の働きの下にある状態というのである。これに対して、滝沢克己の「悲しむ者」についての解釈は、「人間が悲しむということとは全然次元の違う悲しみで」あり、「[「さいわいなるかな」] [インマヌエルの原事実] ということに直接結びついている悲しみである」。つまり「本当に祝福 [「さいわいなるかな」] を負うて生まれ、人間が人間としてこの世界で生きるということになると、人間がいかにも無理をして、不自然なことをして自分をも他人をも不幸にしているか、世界を真っ暗にしているかということがよく分るんです。だから「さいわいなるかな」という原福音のこだまにこちらの躰がなると、今まで知っていたのとは全然違った悲しみが湧いてくるのです。イエスの悲しみは、本当に祝福を受けて生れてきた人が本来自然であれば起らざるを得ない悲しみなのです⁶⁸⁾」と、人間が「インマヌエルの原事実」において限定され、それによって支えられ生かされているものであると気がついた人間は現実において人間がいかにもこの「インマヌエルの原事実」を忘れ、無視しているか、そのためにいかに世の中を暗く不幸にしているか、それに対して「インマヌエルの原事実」において神の慈悲・悲しみが既に起っていることにいやが上にも気づかざるをえない、その神の慈悲・悲しみを映して「インマヌエルの原事実」に於てある人間には「悲しみ」が湧き起こってこざるをえないのだ。「悲しむ者」とは、「イ

ンマヌエルの原事実」に限界づけられている人間に本来自然に起こってくる「悲しみ」(神の慈悲の映し)を「悲しむ者」であるのである。従って「その人は慰められん」ということも「悲しむ者」が根を下している「インマヌエルの原事実」においては神の慰めに満ち満ちているから、「慰められん」と即事的なこととして言えるのだ。

さらに「柔和なる者」について。K.バルトは「悲しむ者」と同様に「端的にその状態、否、その苦しみを」経験している者のことであると言う。バルトは、「柔和なる者」と解さず、「卑しめられた人々」(πραεῖς)⁶⁹⁾と、それを「苦しんでいる者」と明確にしている。従って、「卑しめられた人々」も「真に悲惨な人々」であり、救い主の働きを切望している者として「神の国に直面している」のである。それに対して、滝沢克己は、「悲しみ」が「インマヌエルの原事実」に於て起こっている神の慈悲・悲しみであると受けとめたように、「柔和なる者」とは「インマヌエルの原事実」に働いている神の和解・神の愛・神の罪の赦し等の神の柔和さを映して、生きる者のことである。従って、「インマヌエルの原事実」に信頼して生きるものは、この地上は「神の国」・神の支配の下にあるのであるから、「柔和なる者」は「地を嗣ぐ」と即的に言うことができるのである。

次に「義に飢え渴く者」について。K.バルトは、「悲しむ者」「貧しい者」「卑しめられた者」と同様に「極端にその状態、否、その苦しみに対して語られている」のであるとし、「義に飢え渴く者」とは「すべての義を失いそれを求めている者である⁷⁰⁾」と言う。或いは、「義に飢えかわいている人たちは、——そして客観的にすべての人間がそのような者なのであるが——彼〔律法授与者〕がその義を造り出し、与えることによって、飽きたりるようになるであろう(五・六)。なぜならば、彼は律法を成就するためにこられた(五・一七)からである⁷¹⁾。」と律法成就者であるイエスの働きによって義が造り出される、そのことの以前には「すべての義を失なっ」ている悲惨な状態に人間はあるというのである。或は「それはまさにみ国の義(六・三三)——それなしには何人も天国にはいれず、それであるからそれを飢え渴くように求めること(五・六)はまことに心の持ち方の問題ではなく、人間的な生のリアルな、最もリアルな規定であり、それに対してすべての人が服させられておる⁷²⁾」とイエスの律法を成就する働きの方から人間の痛み・悲慘を見ているのである。これに対して、滝沢克己は、「さいわいなるかな」という根源的事実を前提にして、つまりイエス以前から「神の義」がそこに実在するということから、「人間の存在は貧しいものだということ、人間が主体ではない神様の僕だ^{しもべ}という・そこに人間の正しさの源〔神の義〕があるわけですから、——人間が人間として正しく生きるということはそこ〔「インマヌエルの原事実」〕を踏えなければできない、そこからしか出てきませんから——

「義に飢え渴く」ということになるのです。その人間の正しさの源を受けたいということ、[自分の根底に既に来ていた神の義] 源から口をつけてその息を吸いたいということ、そして本当にホッとしたいということ。「さいわいなるかな」という言葉が出てくる[ところにある] 神の義が、世界に溢れるようにということ。そして、その人は必ず「飽くことを得ん」、それは、ないところから空に向って飢え渴いているわけでないです、「義」が「義の泉」が実際に実在する、そこから飲もう、いただくというわけですから、それは「飽くことを得ん」です⁷³⁾。つまり、「義に飢え渴く者」とは、「インマヌエルの原事実」・神の義に根を下した人間の即事的な、リアルな規定ということである。

そして、「憐れみある者」「心の清き者」「平和ならしむる者」について、K.バルトは、「ある種の人々の行為」について、しかも「神の国 [イエス] に基づいて呼び起こされ・動かされ・規定され・方向づけられている⁷⁴⁾」人の行為に対して「さいわいである」と賞讃されている者のことであると言う。即ち、「憐れみある者」「心の清き者」「平和ならしむる者」とは、イエス（救い主）の働き・「天にいます父」の働きをその行為の「根源⁷⁵⁾」に持ち、その根源によって呼び起こされて、動かされて、規定されてそのような行為を行う者のことである。「神を見るであろうとの約束をもっている「清い心」（五・八）とは、イエスの決断と言葉で満足し、すべてをイエスの決断と言葉のままに決定し、彼に対してこの決断を通して与えようと約束された生を、すすんで生きようとしている者の即事性のことである。このことをすることは（七・一三以下）狭い門からは入り、狭い道を行くことである」とバルトは解釈する。イエス（神の国）の働きによって引き起こされた行為をする者であり、従って、「インマヌエルの原事実」に於てある、既に実在する「神の憐れみ・神の平和・神の聖さ」を映し出す行為をする者ではないのであり、「神を見ん」「慰められん」「神の子と称えられん」とは「約束」であり、「イエスによって、」「インマヌエルの原事実」が成立する、実在的となることによって、実現されるものであるのだ。これに対して、滝沢克己の解釈は、「さいわいなるかな」という「インマヌエルの原事実」つまり人間・世界の大前提・根源的な実在的事実に於てある人間の本来的な在り方、つまり「インマヌエルの原事実」に実在する「神の憐れみ」「神の聖さ」「神の和解」「神の敵を愛する愛」を映し出す、表現する在り方を実現している者を「憐れみある者」「心の清き者」「平和ならしむる者」とするのである。「憐れみある者」というのも、「悲しむ者」というのを、他の人に対する面で言われたことと考えればよい。「心の清き者」のとは、我々の心というのは余計な思い煩いわずらに満ちてますから「そういう我々の恣意というものがすっかり消されたところから生きる人、という意味です。だから、この祝福（「さいわいなるかな」

＝インマヌエルの原事実)を負うて生きる人は心のこだわりや食欲というものから解放されるということです。「その人は神を見ん」。実際神はそこにいるわけですから、神が来ているそこが地上ですから、自分のいるところですから、「その人は神を見ん」です。「さいわいなるかな、平和ならしむる者」とは、本当に「義に飢えかわく」、そういうふう「悲しむ」、そういうふう「憐れむ」ということは、本当に平和が実際に人間の世界に、また一人一人の心に訪れるということと一つのことです⁷⁶⁾。と。従って、「憐れみを得ん」「神の子と称えられん」も「神を見ん」と同じことを言っていることになる。

最後に「さいわいなるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり」について。K.バルトは、「マタイ五・一〇以下で、義のため・イエスの御名のため、イエス御自身のために迫害され、悪口を言われ、排斥され、憎まれ、除外される人々が、「さいわいである」と賞讃される。彼らは天国の義を告白し、イエスを告白するのであるから、行為する者であるが、しかしそのような行為によって迫害・侮り・憎しみを身に招くのであるから、苦しまなければならない。そのような状況の基礎は(まったく直接的に)イエスと彼らの間の極めて特別な関係である。彼らはイエスを否むことができないのであるから、「キリストの苦しみにあずかる」ということを免れることはできず、拒むこともできない。彼らは、直接に、イエスの十字架の陰の中に生きている。しかし、それこそ、彼らの状況を約束に充ちたものにするものであり、明確に天国における状況にするものである⁷⁷⁾」と、イエス(神の国)の働き(十字架での死を自由に決断されたこと)を先立てた、それによって引き起こされた・方向づけられた「自由」な行為であり、それによって規定された状況である。イエスは、このような「義のため」「わたしのために」「責められたる者」を強く(「喜び、よろこべ」)「さいわいなるかな」と賞讃されるのであると、解釈する。これに対して、「イエス(神の国)の働きに依らない、単純・無条件に、太初から実在する「インマヌエルの原事実」に限界づけられたものとして見る、滝沢克己の解釈は、「ここには、柔和なる者の「義のための」闘いが必然的だ(悲しみが避けがたいように)ということも、ここにちゃんと出てくるのです。「わたしのために」というのは、本当に・生命の・隠れているけれども・絶対に確かな足場(「インマヌエルの原事実」)から生きる者は、普通の世の中から敵視され、責められ、いろいろ悪く言われることは避けがたいことで、だからその時にも、やはり喜んでいい、さいわいだ、ということ⁷⁸⁾」と。つまり、「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる者には、その原事実実在する神による悪魔の排除・克服という神の働きを承けて、暗闇の世界にたいする、「柔和なる者の闘い」が必然的である。従って、「インマヌエルの原事実」による、神の義のための

闘いであるから、その原事実を踏えた闘いを行う者にとって、「天国はその人のものなり」と即事的に言うことができるのである。

[二〇一三・九・二四]

註

- 1) E. トゥルナイゼン「山上の説教」蓮見和男訳 新教出版社 1986
Eduard Thurneysen : Bergpredigt, 1936, «Theologische Existenz heute», Heft 46, Kaiser-Verlag
K. バルト「教会教義学 神論 II / 3」吉永正義訳 新教出版社 1983 pp.340-371
KARL BARTH ; DIE KIRCHLICHE DOGMATIK, ZWEITER BAND, DIE LEHRE VON GOTT, Zweiter Halbband, Achstes Kapitel, Theologischer Verlag, 1942 を参照のこと。
- 2) 「聖書を読む マタイ福音書講解」第二巻 創言社 1994 p.12 なお、バルト＝トゥルナイゼンの「イエスが語ったから本当である」というテーゼに関しては、特に『教会教義学 和解論 II / 2 主としての僕イエス・キリスト 上く2』(井上広雄訳) p.68を参照のこと。
- 3) ibid. p.12
- 4) ibid. pp.12-13
- 5) ibid. p.15
- 6) ibid. p.16
- 7) ibid. pp.13-14
- 8) ibid. p.14
- 9) ibid. pp.15-16 なお、バルトの「世界の状況全体の、それと共に人間の状況全体の、既に現実に遂行された徹底的な変化」については、『教会教義学 神論 II / 3 神の戒め』(吉永正義訳) p.350を参照のこと。
- 10) ibid. pp.17-18
- 11) ibid. p.18
- 12) 日本聖書協会 一九五四年改訳(口語訳)
- 13) 日本聖書協会 一九六一年(文語訳)
- 14) ibid. p.19
- 15) ibid. p.19
- 16) ibid. pp.31-32
- 17) ibid. pp.19-20
- 18) 日本聖書協会一九五四年改訳に拠る。
- 19) ibid. p.21
- 20) 日本聖書協会、「新約聖書」一九五四改訳に拠る。
- 21) ibid. p.17
- 22) ibid. pp.21-22
- 23) ibid. p.23
- 24) ibid. pp.24-25
- 25) ibid. pp.30-31
- 26) ibid. pp.31-32
- 27) ibid. pp.32-33

- 28) ibid. p.35
- 29) 「旧約聖書」一九五五年改訳 日本聖書協会に拠る。
- 30) ibid. pp.40-41
- 31) ibid. pp.41-42
- 32) ibid. pp.42-43
- 33) ibid. p.43
- 34) ibid. p.31
- 35) ibid. pp.43-45 ちなみに、「さいわいなるかな」という「恵みの場所」には、虚無に対する、従って死に対する絶対的な否・拒絶・排除の闘いもあるのである。
- 36) ibid. p.44
- 37) ibid. p.25
- 38) ibid. pp.45-46
- 39) ibid. pp.46-47
- 40) ibid. pp.47-49
- 41) ibid. pp.49-53
- 42) 註1) 参照。カール・バルト「教会教義学 神論 II / 3 神の誠め」吉永正義訳 新教出版社 1983
- 43) KARL BARTH, DIE KIRCHLICHE DOGMATIK, VIERTER BAND, DIE LEHRE VON DER VERSÖHNUNG, Zwiter Teil, Fünfzehntes Kapitel, § 64, Evangelischer Verlag, 1955
カール・バルト『教会教義学 和解論 II / 2 主としての僕イエス・キリスト』上〈2〉』井上良雄訳 新教出版社 1966
- 44) 「教会教義学 神論 II / 3」吉永正義訳 p.346
- 45) ibid. p.348
- 46) ibid. p.348
- 47) ibid. p.349
- 48) ibid. p.367
- 49) ibid. pp.350-351
- 50) ibid. pp.357-358
- 51) 「教会教義学 和解論 II / 2」井上良雄訳 p.61
- 52) ibid. p.61
- 53) ibid. p.62
- 54) ibid. pp.64-65
- 55) ibid. p.64
- 56) ibid. pp.65-67
- 57) ibid. pp.67-68
- 58) ibid. pp.68-69
- 59) 「教会教義学 神論 II / 3 神の誠め」吉永正義訳 p.358
- 60) ibid. p.359
- 61) ibid. p.359
- 62) ibid. p.357
- 63) 「聖書を読む マタイ福音書講解」第二巻 p.31

- 64) ibid. pp.31-32
- 65) ibid. p.32
- 66) 旧約聖書 「創世記」二・七
- 67) 「教会教義学 和解論 II／2」 p.66
- 68) 「聖書を読む マタイ福音書講解」第二卷 pp.40-41
- 69) 「和解論 II／2」 p.65
- 70) ibid. p.65
- 71) 「神論 II／3」 p.355
- 72) ibid. p.353
- 73) 「マタイ福音書講解」第二卷 pp.45-46
- 74) 「和解論 II／2」 p.64
- 75) ibid. p.65
- 76) 「マタイ福音書講解」第二卷 pp.46-47
- 77) 「和解論 II／2」 p.67
- 78) 「マタイ福音書講解」第二卷 pp.47-48 なお「ここに闘いが必然的だということも出てくる」と言われていることに関して、闘いはどこまでも僕の闘いである故に、敵を愛する神の愛を承けてそうするのであり、それが自己目的化されると悪魔に足をすくわれることになる。従って、椎名麟三の言うごとく、「インマヌエルの原事実」を踏えた闘いは二方面作戦たらざるをえない。敵に対する闘いと同時に自己絶対化に対する闘いとである。イエスの闘いを見てもみる必要がある。マタイ26：47-56（「裏切られ、逮捕される」）を参照のこと。

[以上]